

## 2日目 オフィチエンシム アウシュビッツ第1収容所—4

### アウシュビッツ博物館で歴史を伝える日本人—中谷剛さんとの対談—

予定では2日目の午後を自由行動にしていました。

けれども、青少年センターの予定がなくなってイベントがひとつ減ったのと、時間が空くと何かをいれなければいけないような貧乏症なので、ガイドのモニカさんにダメモトでちょっとお願いをしてみました。

そうしたら、なんとそれがその日の夜に叶うことに！



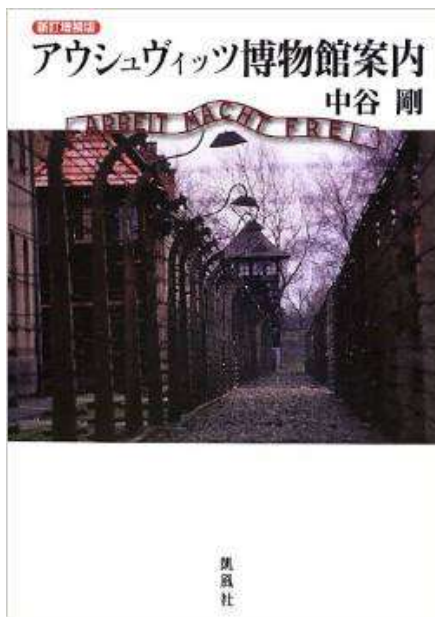
やっと宿泊先に到着

今回のガイドはポーランド人のモニカさんをお願いしました。

ポーランド人がアウシュビッツのことをどう思っているかを知るのも狙い、という旅行会社の意図に賛成し、それで何の疑問もなく進めていたからです。

けれども、アウシュビッツ博物館には日本人の公式ガイドの方が1人だけいらっしゃいます。中谷剛さんです。

「アウシュビッツ博物館案内」という本も執筆されています。



Amazon より引用、画像は 2012 年に発行された改訂版

ツアー中、先生は中谷さんの本をずっと携えながらアウシュビッツを回っていらっしやいました。

その姿をみたとき、「この人に会えるの？」と先生が、その本を私に示しながら、授業中に質問されたことをふと思い出したのです。

今回は、ポーランドの人に全部案内してもらおうのが趣旨です、とそのときは申しあげましたが……

会えるのなら、私も話を聞きたい……

中谷さんにとっても、立花先生が自分の本をもってアウシュビッツを回っているとお知りになったら、悪い気はしないはず……

というわけで、モニカさんに、博物館に取り次いで、中谷さんに会えるようお願いできないか、と頼んでみたところ……

「私、中谷さんの携帯、知ってます！」

というわけで……直接、電話をかけてくださいました！

少々姑息ですが、先生の名前を最大限使いました。

評論家の立花隆がきている、ぜひ会ってほしい、そう伝えてくださいと。

そんなことをしなくても、中谷さんはいらしてくれたかもしれませんが。

私は千載一遇のチャンスを逃すまいと必死だったのです。

そして、その夜、中谷さんが私たちの宿泊先にいらしていただけることに！

先生は、中谷さんにお会いできるやいなや、  
それまで見てきたことの感想や、感じた疑問を一気にぶつけはじめました。

「なぜ、あれほどドイツは執拗にユダヤ人を追い詰めたのか？」  
先生がアウシュビッツで常に発している問いに対して、中谷さんはこう答えました。  
個人的な意見として聞いていただきたいが、と前置きされながら、

俗にいう「ドイツ人のコンプレックスの裏返し」だと思う、と。

ところが古ねこ・立花先生、「コンプレックス」なんてものでは説明できない、宗教的なものではないか、いやそれは反宗教的でもあるのだが、経済的合理主義というか、とにかくわからない、と激しく反応。

ドイツでみた第2次世界大戦を振り返るテレビの話、当時のドイツ人のアウシュビッツの認識、ドイツと日本の戦争体験の継承の課題、パレスチナ問題へとどんどん話が広がっていく

そのやりとりの中で私が感じていた10年前に訪れたときとの温度差の謎も少し解け始めました。

- ・10年前は一番見学者が落ち込んでいた時期。  
(当時はなんだか寂しい感じがしたのに、いまは観光客ばかりと感じたので)
- ・アウシュビッツは犠牲者を追悼する「墓地」であり、観光地化することに懸念がある
- ・アウシュビッツがドイツだけでなくヨーロッパ全体の問題として捉えなおされている。

さらに、センターで戸惑った「戦争状態」、それ以前と以降ではポーランド人の何かが違うという点に関してもヒントが。

- ・戦争状態（連帯）を経て、教育が変わった
- ・それ以降は、エリートの間でもアウシュビッツの受け取り方が違う
- ・冷戦前はポーランドでユダヤ人を助けたという点、近所や国家から目をつけられかねなかった。ユダヤ人を助けたことは、いまみたいに自慢できず、助けた人も口に出せない時代があった。

教える国家の歴史が変わる、これは国民のアイデンティティも大きく変わるということな

のだろうか。それがモニカさんのいっていた、戦争状態の以前と以降では違うポーランド人の何かだろうか？

そして、その教育で育った世代が社会を動かす側になったとき、大きな変化が起こる。

「ベルリンの壁崩壊後の動きも、あの（戒厳令下に生まれた）世代の動きがあったからというところもあるのではないか」

「日本もしばらく前からポスト冷戦時代になり、大学にそのなかで教育を受けた連中が入ってきている。考えてみれば、おんなじことが起きているわけで、ポスト冷戦時代になったという変化は、いま出ているはず」

先生はこう感想を述べていた。

そして、明日の午後、時間が空いているがどう過ごしたらいいだろうか、という質問に、中谷さんは、各自のペースでじっくりと回ることを提案されました。

それはネコにあう回り方だったのかもしれませんが。

ツアーのように急ぎ立てられることなく、

直観にしたがって、

アウシュビッツを「感じる」ということが。

なお、私は翌日、第 2 収容所を見に行ったあと、立花先生と一緒に第 1 収容所に戻り展示を見直しました。

夕方で人が少なく、雨が降っていて展示室の中はひっそりとしていました。

そのとき初めて、私は 10 年前の記憶と重なりました。

私というネコは、中谷さんのアウシュビッツは「墓地」という言葉を、

このときようやく「感じる」ことができたのです。

#### ■中谷さんの言葉

もうひとつ、印象に残った中谷さんの言葉を記しておきます。

「私は歴史家でも研究者でもない。ただのガイドです。」

その姿勢がとても謙虚で素敵でした。

—中谷剛さんについて

<http://www.e.okayama-u.ac.jp/~taguchi/kansai/nakatani.htm>